

富山県

## 新湊市埋蔵文化財分布調査報告II

1998年度

1999年3月

新湊市教育委員会

富山県

# 新湊市埋蔵文化財分布調査報告II

1998年度

1999年3月

新湊市教育委員会

## 序

新湊市は天然の良港である放生津潟を擁し、縦横に走る河川によって周辺の地域と結ばれ、その水の利を活かし、古くから日本海側の海運と漁業の拠点として発展してきました。

鎌倉時代には越中守護所がおかれ、また室町将軍足利義材が滞在するなど、越中の政治・経済・文化の中心地として栄えました。往時の活発な人々の交流、物資の運搬などその賑わいが偲ばれます。

先人が残した歴史・文化・風土は、現代に生きる私たちが未来に引き継ぐ貴重な財産です。市内にのこる遺跡も、地域に根ざした歴史を語る財産であり、郷土資料の一つと言えるでしょう。

昨年度から、遺跡地図を整備し、また開発行為との事前調整に役立てるため、市内遺跡の分布調査を始めました。今年度は、その2年目にあたります。

この報告書には不備な点も多々あると思いますが、より多くの人に活用され、文化財保護の一助になりましたら幸いです。

終わりになりましたが、地元の方々をはじめ多大なご協力とご援助をいただきました関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成11年3月

新湊市教育委員会

教育長 糸岡 荘吾

## 例　　言

- 1 本書は、新潟市教育委員会が国庫補助をうけて5か年計画で実施している、遺跡詳細分布調査の次年度（1998年度）の調査報告書である。
- 2 調査は富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室の指導および協力を得て、新潟市教育委員会が主体となり実施した。
- 3 今年度の調査は、新潟市作道地区を対象とした。
- 4 調査参加者は下記のとおりである。（敬省略　五十音順）

（現地調査）

阿部　来　荒木　慎也　磯村　愛子　瓜生日奈子　岡田　一広　小幡　鯛子　表原　孝好　片桐　清恵  
川端　良招　後藤　晋　佐々木建二　佐々木亮二　佐藤　慎　砂田　善司　高橋　泰生　塚田　直哉  
戸簾　暢宏　早川さやか　不嶋　美徳　的場　茂晃　三浦　知徳　八巻　謙司　山口　歎志

（以上富山大学人文学部考古学研究室）

- 5 本書の作成は、下記の協力をうけて新潟市教育委員会文化財保護主事　宗　融子が行った。  
（室内整理）（敬省略　五十音順）  
浦山みこと　楠井　悦子　前田三津子
- 6 今回掲載した遺物の中には、この調査以前に新潟考古歴史サークルが採集した遺物が含まれている。
- 7 本書の作成にあたっては、富山県埋蔵文化財センターの諸氏から貴重なご教示をいただいた。記して謝意を表したい。
- 8 新潟市立南部中学校郷土歴史クラブの採集遺物については、新潟市立南部中学校で保管されていたものを、新潟市教育委員会がこれ以前に譲り受けたものである。貴重な資料を提供していただき厚く感謝申し上げる。
- 9 採集遺物、記録図面等は新潟市教育委員会が一括して保存・公開している。
- 10 本書の図面・写真図版の表示は下記のとおりである。

- (1) 第4図の凡例は次による。

 埋蔵文化財包蔵地

○ 鑄文時代遺物      ● 弥生・古墳時代遺物  
▲ 古代遺物      ▽ 中世遺物  
■ 近世以降遺物

- (2) 遺物実測中のスクリントーンの貼り込みは次のとおり表現した。

赤彩 

須志器 

珠洲焼 

# 目 次

## 序 文

例 言

目 次

Iはじめに	1
1 新湊市の地勢と環境	1
2 調査の目的と方法	1
3 1998年度調査区概要	2
II分布調査の成果	5
1 遺跡と採集遺物	5
(1) 朴木A遺跡 (周知)	5
(2) 高島A遺跡 (周知)	5
(3) 鏡宮北遺跡 (周知)	6
(4) 鏡宮II遺跡 (周知)	6
(5) 作道遺跡 (周知・範囲変更)	7
(6) 久々瀬遺跡 (周知)	7
(7) 鏡宮遺跡 (周知)	7
(8) 高木・荒畠遺跡 (周知)	7
(9) 南浦遺跡 (周知)	8
(10) 津幡江遺跡 (周知・範囲変更)	8
(11) 津幡江西遺跡 (周知)	8
(12) 今井遺跡 (周知・範囲変更)	9
(13) 今井南遺跡 (周知・範囲変更)	9
(14) 今井二島遺跡 (周知)	9
(15) 今井内遺跡 (新)	9
(16) 野村遺跡 (新)	10
(17) 東津幡江遺跡 (新)	10
2 所蔵資料について	10
(1) 新湊市立新湊南部中学校 郷土クラブ資料について	10
(2) 作道地区的資料について	11
3 遺物の散布状態	11
(1) 繩文時代の遺物散布状況	11
(2) 弥生・古墳時代の遺物散布状況	12
(3) 古代の遺物散布状況	12
(4) 中世の遺物散布状況	12
(5) 近世以降の遺物散布状況	12
4まとめにかえて	13

## 図面目次

第1図	新湊市位置図
第2図	調査地区割り図 (1/7万5千)
第3図	1998年度調査地区概要図 (1/5Ji)
第4図	1998年度調査地区遺跡地図 (1/2万)
第5図	遺物実測図 採集遺物 (1/3)
第6図	" (1/3)
第7図	" (1/3)
第8図	" (1/3)
第9図	遺物実測図 (1/3)
第10図	縄文時代の遺物散布状況 (1/2万)
第11図	弥生・古墳時代の遺物散布状況 (1/2万)
第12図	古代の遺物散布状況 (1/2万)
第13図	中世の遺物散布状況 (1/2万)
第14図	近世以降の遺物散布状況 (1/2万)

## 写真図版

図版1	空中写真
図版2	調査風景
図版3	調査風景
図版4	遺跡 (朴木A遺跡・高島A遺跡・鏡宮北遺跡)
図版5	遺跡 (鏡宮II遺跡・作道遺跡・久々瀬遺跡)
図版6	遺跡 (鏡宮遺跡・高木・荒畠遺跡・南浦遺跡)
図版7	遺跡 (津幡江遺跡・津幡江西遺跡・今井遺跡)
図版8	遺跡 (今井南遺跡・今井二島遺跡・今井内遺跡)
図版9	遺跡他 (野村遺跡・東津幡江遺跡)
図版10	遺物
図版11	遺物

# I はじめに

## 1 新湊市の地勢と環境

新湊市は、富山平野を南北に分ける呉羽山丘陵の西側に位置する。

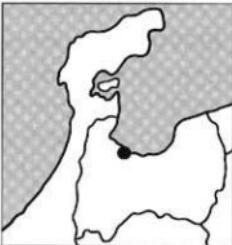
富山湾へ注ぐ庄川の、最下流東岸に広がる低湿地を中心にその市域を形成している。東西11.25km、南北6.74kmと東西に長い市である。人口は約3万8千人で、現在の主な産業にはアルミ加工を中心とした、地場産業である製材業及び漁業などがある。

射水平野と呼ばれるこの低湿地の中央には、かつて、海退や土砂の堆積によってつくられた放生津潟があり、現在は富山新港として利用されている。

放生津潟は縄文時代前期の縄文海進のころは、現在の射水丘陵のあたりまで広がっていたとみられる。その後、気候の寒冷化に伴い次第に陸地化し、庄川・和田川・下条川・鍛治川・神楽川などの諸河川によって運ばれた砂や粘土は、所々に微高地を形成していった。このような氾濫流路間につくられた自然堤防洲などを中心に、この土地での人々の生活が始まったと考えられている。

古代には高岡市伏木に国衙が置かれ、近くには亘理湊が設けられた。しかし気候の寒冷化に伴う海水面の低下によりその機能が低下したため、現在の新湊市街地である放生津にその機能が移されたと考えられている。鎌倉時代中頃には、放生津の地名が現れるようになる。越中の守護所が置かれるなど、中世の放生津は越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた。

往時は三角州の末端のように低湿で、特に潟の周辺は水郷の低湿地であったという。低湿地の多くが水田に利用され、縱横に水路が走り、タズルやイクリと呼ばれる舟の交通路ともなっていた。橋架用と水路の岸崩れ防止に頼られたトネリコ並木が、水郷地帯ならではの独特的景観をかもし出していたが、昭和30年代から40年代にかけてすすめられた富山新港設置や場整備などにより、湿地解消の努力が重ねられ、周辺の景観は一変した。



第1図 新湊市位置図

## 2 調査の目的と方法

新湊市では昭和30年代から40年代にかけて富山新港設置や場整備など大型の事業がすすめられた。これまで工事中に土器などの遺物が見付かっても注意が払われることは少なく、あるいは工事の妨げになるものとして除外されることもあった。かつては海であり、新湊市のように低湿な土地には人々は生活していないかったと考えられるがちだったのだろう。

富山県が発行した昭和47年「富山県遺跡地図」には、新湊市の遺跡は34か所記載されている。また平成5

年度発行の「埋蔵文化財包蔵地地図」には、39か所の遺跡が記載されている。これは、昭和40年代の調査が基本となっており、伝聞・推定によるものや、開発行為に先立つ調査によって明らかになったものが多く、未調査地域も残されているものと思われる。

ここ数年、開発行為に先立ち散在的に行なう分布調査や発掘調査によって、新たに発見される遺跡や、範囲の修正が必要と思われる遺跡、中には人知れず葬られていった遺跡も少なからず存在することがわかつてきだ。

そこで、埋蔵文化財の保護と活用、開発行為との調整のため、市域全体を対象とする系統だった分布調査を実施し、遺跡地図及び台帳を充実させることとした。

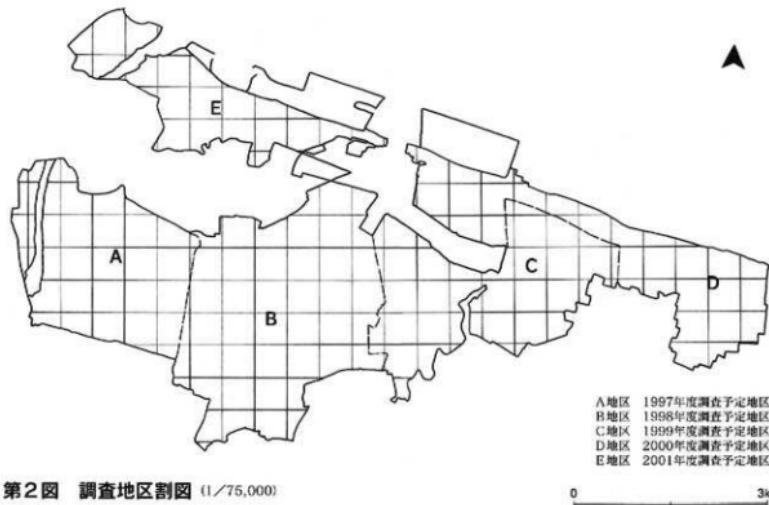
調査は、新湊市が国庫補助をうけ、富山大学考古学研究室、富山県埋蔵文化財センターの指導と協力を得てすすめることとなった。市域を5つの地区に区分し、平成9年度から平成13年度まで5か年の予定で行うこととした（第2図）。順次現地踏査を実施し、その成果は年度ごとにまとめるものとする。また最終年度には、小字名などを調査するとともに市内全体をまとめた遺跡地図を発刊する予定である。

### 3 1998年度調査地区概要

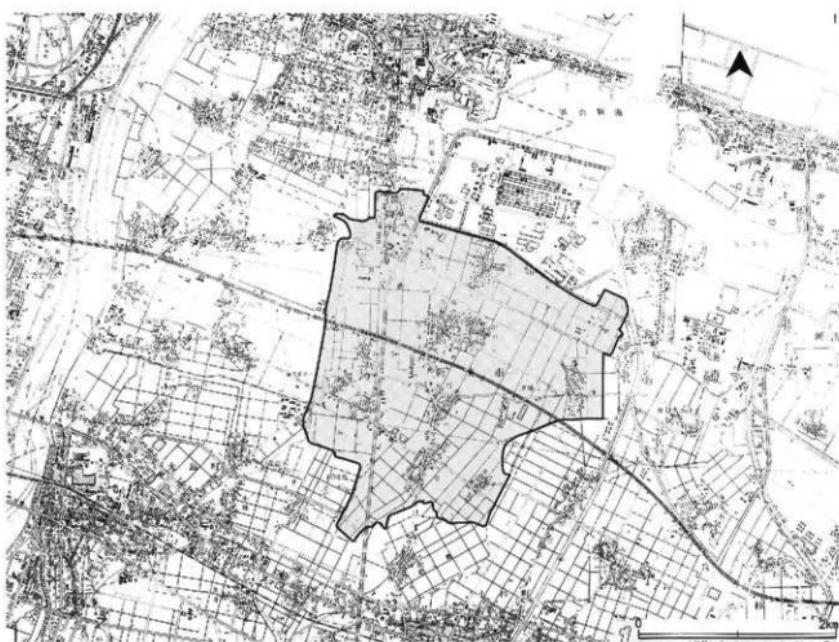
今年度の調査対象は、新湊市の南部に位置する作道地区である。全体としてみると射水平野北西部に広がる複合扇状地性の三角州平野といえる。標高の高い所は作道地区南西部で約3.1mである。低い所は東央部の約-0.1mで、ここは新湊市域の中でも最も低い地点である。範囲は富山新港の埋立て地を除くと、東西約3.0km、南北約3.0kmである。北は高岡市及び富山新港、南は大島町及び小杉町、東は新湊市片口地区、西は新湊市塚原地区及び大島町と接する。現在この地区的鏡宮地内には平成10年に新湊市博物館が建てられ、江戸時代後期射水郡高木村に生まれた石黒信由関係の「高樹文庫」資料、ならびに久々湊出身の陶芸家で人間国宝の石黒宗齊資料などが展示、保管されている。

現在の作道地区は、明治22年の町村制施行に伴い、作道、殿村津幡江、今井、高木、布目、鏡宮、久々湊、野村津幡江、東津幡江、沖の10か村が合併してできた。かつては東西神楽川、石丸川、勘兵衛川、大坪川、下条川などの川が地区の中を流れて、放牛津潟に流れこんでおり、ひろく水郷農業が営まれていた。

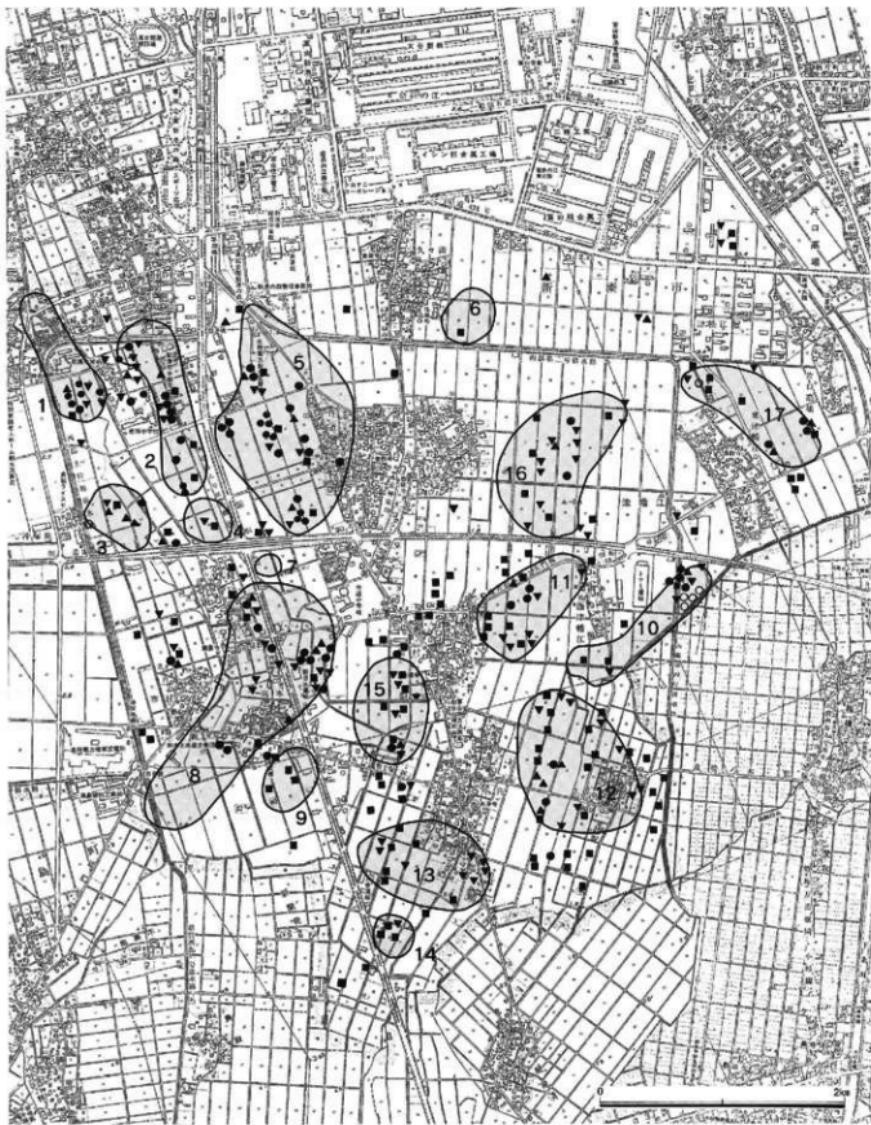
「作道」の地名の由来は、地区に鎮座する道神社に起因するといわれている。現在の道神社が、道神社と称するようになったのは江戸時代中期以降のことである。延喜式神名帳に記載された古代式内社の道神社が作道にあったとはかならずしもいえない。しかし、道神社と同じ神楽川沿いに広がる北高木遺跡から「道長大神」の文字がみえる木簡が出土していることや、道神社は石川県加賀の豪族道氏の崇拝者とその先祖を祭っていることなどから、道氏は作道周辺で活躍したと推測され、作道はなんらかの根拠地であったとも考えられている。



第2図 調査地区割図 (1/75,000)



第3図 地区概要図 (1/50,000)



第4図 B地区遺跡地図 (1/20,000)

## II 調査の概要

### 1 調査結果概要

今回の調査対象地域の周知の遺跡は、1972年発行の「富山県遺跡地図」では7遺跡、1993年発行の「富山県埋蔵文化財包蔵地地図」では9遺跡が確認されている。その後、分布調査や発掘調査などにより、新たな遺跡の発見や範囲の変更などがあり、今年度の分布調査を行なう時点では14遺跡が周知されていた。

今回詳細分布調査を実施し、現地踏査及び資料整理を行なった結果、14遺跡のうち4つの遺跡の範囲を変更し、新たに3つの遺跡を追加した。

#### (1) 朴木A遺跡 (周知: 第4図-1)

朴木集落と神楽町の間に位置する。かつての西神楽川である、西部主幹排水路の南北に広がる遺跡である。現在、遺跡の中央部分には新湊市民病院がある。その範囲は東西約180m、南北約560mである。標高は、約1.9mである。

昭和40年代の西部主幹排水路の工事の際に、弥生土器を中心とする土器やシミ貝などが露出していたと伝えられている。1972年発行の「富山県遺跡地図」では、土師器、須恵器が出上ると記録されており、古くから知られている遺跡である。また、同地図及び1993年発行の「富山県埋蔵文化財包蔵地地図」では、北側の朴木A遺跡と、市民病院を中心とする朴木B遺跡とに分かれていたが、その後遺物の散布状況などから範囲を拡充して、一つの遺跡となっている。しかし現在は、遺跡の北側の多くは宅地化されており、実態が不明なところもある。

遺物は主に主幹排水路の土手や、遺跡の南側部分で採集された。以前より採集されていた弥生土器や青磁、備前などに加えて、今回弥生土器、須恵器、珠洲焼、越中瀬戸が採集された。

内、図示したものは第5図-1~7である。1~4は弥生土器である。1・4はそれぞれかめの底部及び口縁部、2は壺の底部である。3は小型土器の底部である。5は越中瀬戸のすり鉢である。灰釉がかけられる。6~7は珠洲焼の甕か壺である。

#### (2) 高島A遺跡 (周知: 第4図-2)

新湊市立新湊南部中学校と国道472号線の間に位置し、南北に広がる遺跡である。遺跡の範囲は東西約170m、南北約720mで、標高は約1.5~1.8mである。遺跡の中央部である南部中学校東側部分がもっとも標高が高い。

1972年発行の「富山県遺跡地図」、及び1993年発行の「富山県埋蔵文化財包蔵地地図」では、北側の高島A遺跡と、南部中学校付近を中心とする高島B遺跡とに分かれていたが、その後遺物の散布状況などから範囲を拡充して、一つの遺跡となっている。旧の高島A遺跡の範囲(現在の遺跡範囲の北側付近)は宅地化され

ており、その実態は不明である。遺跡のはば中央部には、南北に北西部第6号排水路が施かれているが、旧の高島B遺跡の範囲である南部中学校東側のその上手一帯は、以前より弥生土器が多く散布する場所として知られていた。

平成10年度には排水路の改修工事に伴い試掘調査を実施したが、多数弥生土器が出土している。また、平成9年度には、その南側において、民間開発に伴い行なった発掘調査で、弥生時代中期以降の住居跡などが発されている。遺跡は、北側において広がることが確認されており、南部中学校東側一帯に、弥生時代の遺跡が遺されていることが推定される。

遺物は、改修工事の残土などから弥生土器が多数採集された。他に、珠洲焼、唐津が採集されている。また以前の踏査において、ヒスイ、須恵器、近世陶磁器も採集されている。

内、図示したものは第5図-8~31の弥生土器及び第6図-32~37の珠洲焼である。8は二重口縁をもつ壺である。9・12~13も壺とみられる。10・11・19は有段擬凹線の壺、18はくの字状口縁をもつ壺口縁部である。17・21~23・31も壺の口縁部である。21の内面はハケ状具による絞杉状文、外面はヘラによる刻み目が施される。23の外側も同様である。20はハケ調整後、ハケによる斜行線文が施される。15は鉢型土器とみられる。14・30・25は高杯の杯部及び脚部である。16は櫛台の脚部とみられ、脚裾が折返し面をなすものである。24は蓋つまみである。26~29は甕か壺の底部で、27是有孔である。

かがのみやけた

### (3) 鏡宮北遺跡（周知：第4図-3）

鏡宮集落の北西にあり、朴木A遺跡の南側に位置する。西部主幹排水路と、国道8号線が交差する角に広がる。東西約250m、南北約260mの範囲である。標高は約1.6~2.0mである。

遺跡の所属時期は弥生・古墳・近世として知られているが、過去に行なった試掘調査では遺構は確認されておらず、その性格は不明である。

採集した遺物は、弥生土器、須恵器、珠洲焼、近世磁器である。他に、以前の踏査において縄文土器が採集されている。

図示したものは第6図-38~41である。38は縄文土器深鉢胴部である。西部主幹排水路の下手で採集した。40は須恵器である。39・41は珠洲焼である。

かがのみやけた

### (4) 鏡宮II遺跡（周知：第4図-4）

高島A遺跡の南側、鏡宮北遺跡の東側、鏡宮集落の北側に位置する。遺跡の範囲は東西210m、南北約170mで、標高は約2.0mである。遺跡は散布地であり、現在、遺跡の大部分は平成10年にオープンした新潟市博物館となっており、遺跡は事実上消滅している。

博物館が建設される以前に採集した遺物は、須恵器、珠洲焼、近世陶磁器、錢貨である。

第6図-42の貨幣は寛永通宝である。

づくりみち  
**(5) 作道遺跡 (周知・範囲変更: 第4図-5)**

作道集落の北西に位置する。東神楽川と西神楽川の間に位置する。遺跡の範囲は、東西約460m、南北約930mを測るが、今回西側へ約60m拡充した。標高は、約0.4~1.8mである。遺跡の東側から西側に向けて高くなっている。

平成5年度及び平成9年度に行なった試掘調査では、弥生時代の遺跡が良好に保存されていることが確認されており、現在も水田下に眠っている。

今回探集した遺物は、全体に弥生時代の遺物が多く、遺跡の内容は高島A遺跡と似たものと考えられる。

図示した遺物は、第6図-43~53の弥生土器である。43は壺頭部外面に鋸歯状のヘラ描沈線文が施される。45はわずかに外反する口縁をもち、外端面をヘラ状具で刻む。46の外面はハケ状具で刻み目が加えられ、内面は纏状文が施される。51の内面も同様である。49・50の口縁部内面には斜行線文がみられる。52~53は、疊か壺の底部である。作道遺跡の弥生土器は、全体に弥生時代中期に所属するものが多いようである。

くくみなと  
**(6) 久々渋遺跡 (周知: 第4図-6)**

久々渋集落の東側に位置し、東神楽川の東側に広がる。遺跡の範囲は、東西約210m、南北約210mである。標高は約0.2~0.8mである。

以前、集落の東方約100mの用水路付近で、縄文時代晚期の土器が探集されているが、今回遺物は探集できなかつた。

かがのみや  
**(7) 鏡宮遺跡 (周知: 第4図-7)**

鏡宮集落の東側に位置する。遺跡の範囲は、東西約100m、南北約100mを測る。標高は約1.8mである。弥生時代の遺跡として知られているが、その実態は不明である。

今回、遺物は探集できなかつた。

たかき あらはた  
**(8) 高木・荒畠遺跡 (周知: 第4図-8)**

新湊市布日・高木と、大島町北高木の2市町境界にまたがって広がる遺跡である。西神楽川と東神楽川の分流付近に位置する。現在、大島町に広がる範囲を北高木遺跡、新湊市に広がる範囲を高木・荒畠遺跡と称しているが、両者は一体のものである。

高木・荒畠遺跡の範囲は、東西約310m、南北約1,130mを測る。標高は約2.0~2.8mで、遺跡南側部分の大島町との境界付近がもっとも高くなる。

遺跡は、縄文時代から中世にいたる複合遺跡である。昭和63年の大島町荒畠遺跡の発掘調査では、幅2mの溝より8世紀後半から10世紀初頭までの遺物が特に多く出土している。

また、平成4年から同6年にかけては、企業団地造成に伴い大島町北高木遺跡の発掘調査が行われ、須恵器、土師器、木簡、版木板や下駄といった木製品などが川跡から出土した。さらに畜牛、人形、馬形など祭祀にし

か使用されることのない遺物が出上して注目を集めた。遺跡の性格については、莊園に開闢した遺跡とする説や、官衙といった公的な性格をもつ遺跡とする説などがあるが、どこまでも興味がつきない遺跡である。

新湊市側でも平成5年に試掘調査が行われ、弥生時代から中世までの遺跡が良好に保存されていることがわかっている。

今回及びこれまでの調査で、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、唐津などの肥前陶磁器をはじめとする近世陶磁器が採集されている。

内、図示したものは、第6図-54～56である。54は瀬戸系の近世陶器である。55は珠洲焼の壺、56も珠洲焼である。

また、遺跡としてのまとまりは認められなかったが、遺跡の範囲外西側でも遺物が採集されており、周辺の遺物として、第7図-58～60の珠洲焼を示した。

#### (9) 南浦遺跡 (周知: 第4図-9)

高木集落の南に位置する。標高は約1.8～2.0mで、北に広がる高木・荒堀遺跡から次第に低くなったところにある。その範囲は東西約200m、南北約300mを測る。

主に弥生、近世の遺物が散布するが、過去の試掘調査では遺構などは発見されていない。

今回採集した遺物は、肥前陶器である。内、図示したものは、第6図-57である。伊万里焼の蓋で、蓋の甲外側に、年の染め付けがみえる。

#### (10) 津幡江遺跡 (周知・範囲変更: 第4図-10)

西津幡江集落の東側に位置し、小杉町との境界付近に南北に長く広がる。標高は0.6～0.8mである。遺跡の範囲は東西約110m、南北約450mであったが、今回の調査によって、周知の範囲よりさらに北側の墓地近辺にも、遺物が多く散布することが分かったため、その範囲を北側へ約250m拡充した。

これまでの調査で採集できた遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、越中瀬戸である。特に遺跡北側部分では弥生時代の遺物が顕著であり、昔から弥生土器が出土する場所として知られていた。また、新湊市の遺跡においてはあまり表採できない縄文土器が、比較的まとまって散布することも注目される。

内、図示した遺物は、第7図-61～64・65～68である。61～62は縄文土器である。2点は小杉町との境界付近の同じ場所で採集した。63は弥生小型土器底部である。64は、珠洲焼小型壺の口縁部である。65～68も珠洲焼である。

#### (11) 津幡江西遺跡 (周知: 第4図-11)

津幡江遺跡の西側にあり、殿村集落と西津幡江集落の間に広がる。遺跡の北側は一般地方道八町・大門千が走る。遺跡の南側は、神楽川の分流である大坪川が流れている。標高は約0.4～0.8mである。遺跡の範囲は東西約240m、南北490mを測る。

これまでに採集できた遺物は、弥生土器、須恵器、珠洲焼、中世土師器、瀬戸美濃がある。

内、図示した遺物は、第7図-68~69・71~72である。68~69は、短い有段口縁をもつ弥生土器の甕か壺とみられる。72は中世土師器である。

(2) 今井遺跡 (周知・範囲変更: 第4図-12)

今井集落東方の水山にあり、大坪川流域に広がる。標高は約0.8~1.1mである。遺跡の範囲は、東西約370m、南北約360mであったが、今回の調査により、周知の範囲よりさらに南東の沖集落付近にも遺物が散在することがわかったため、その範囲を南東に約250m拡張した。

これまでに採集できた遺物は、土師器、珠洲焼、越中瀬戸、肥前磁器、その他の近世陶磁器である。その中でも、特に中世の遺物が多い。

内、図示した遺物は、第7図-73~81である。73~77及び80~81は珠洲焼の甕か壺である。79は越中瀬戸のすり鉢で、鉢目は左回りに2.8cm9条1単位で施される。灰釉がかけられる。75も越中瀬戸皿で、内外面は鉄釉がかけられる。78は黄灰色の胎土をもつ近世陶器碗である。

(3) 今井南遺跡 (周知・範囲変更: 第4図-13)

今井集落の南、大島町との境界付近に位置する。東神楽川と大坪川の間に東西に長く広がる。標高は約1.5~2.0mである。遺跡の周知の範囲は、東西約710m、南北約350mであったが、今回遺物の散布状況から、東側部分を約120m縮小した。

今回の調査までに採集した遺物は、青磁、珠洲焼、近世陶磁器であり、遺跡は中世以降のものと推定される。今井遺跡との関連が伺われる。

(4) 今井二島遺跡 (周知: 第4図-14)

今井南遺跡の南側に広がる。標高は約1.9~2.0mで、遺跡の範囲は東西約180m、南北約180mである。

採集した遺物は、珠洲焼、越中瀬戸、その他の近世陶磁器であるが、遺跡の実態は明らかでない。

(5) 今井西遺跡 (新: 第4図-15)

今回新発見の遺跡である。殿村集落の西側、高木・荒畠遺跡の東側、今井遺跡の西側に位置する。標高は、約1.1~1.7mである。範囲は、東西約350m、南北約400mである。

採集した遺物は、土師器、珠洲焼、越中瀬戸、肥前磁器その他近世陶磁器である。主に中世、近世の遺物が多く、今井遺跡や今井南遺跡などとよく似た性格と思われる。

内、図示した遺物は、第7図-82~85である。82~84は珠洲焼である。85は、越中瀬戸すり鉢の底部で灰釉がかかる。

○ から  
**(6) 野村遺跡 (新: 第4図-16)**

今回新発見の遺跡である。野村集落と、東津幡江集落の間に広がる。標高は、約-0.1~0.6mであり、市内でもっとも標高が低い地域である。ここはかつて大坪川などの河川が範囲は、東西約380m、南北約650mを測る。

探査した遺物は、第8図-87~93・95~97・100~103である。87は須恵器の杯である。88~90・92~93・95~97・100~102は珠洲焼である。88、102はすり鉢であり、102の脚目は幅が狭く、単位に間隔のあるものである。91は青磁碗である。釉は、わずかに緑味を帯びた青灰色で、同安窯系のものであろうか。103の銭貨は宋錢で、元祐通寶とみえる。

ひがしつばたえ  
**(7) 東津幡江遺跡 (新: 第4図-17)**

今回新発見の遺跡である。東津幡江集落の東側に位置しており、大坪川と下条川の間に広がる。標高は、約0.1~0.6mである。範囲は、東西約300m、南北約700mである。

これまでの調査で、弥生土器、須恵器、珠洲焼、近世陶磁器を探査している。

図示した遺物は、第8図-86・94・98~99である。86は須恵器である。外面は格子目状たき目がみえる。95、98は珠洲焼である。95は遺跡の範囲外であるが<sup>1</sup>、遺跡北側の下条川沿いで探査した。94は、中世土師器である。内外面に煤が付着しており、灯明皿として使われたようである。99は、縄文土器である。逆B字状文を施した深鉢胴部片で、縄文中期のものである。また、104の縄文土器深鉢は試掘調査時の発掘品であるが<sup>2</sup>、この遺跡の範囲内から出土しているので、参考として図示した。

## 2 所蔵資料について

### (1) 新湊市立新湊南部中学校郷土クラブ資料について

昭和43年春から昭和46年までの約3年間、新湊市立新湊南部中学校郷土クラブでは、塚原及び作道地区から多くの上器などを採集し、その成果を冊子にまとめている。

これらは、当時着工されていた塚原地区沖塚原、朴木での新港設置に伴う西部主幹排水路工事や、作道地区高島、高木、津幡江での場整備事業の工事掘削土中に散布していた土器などを、生徒が採集して学校に持ち寄ったものである。その上器などは、点数にして約千点余りにも及んでいる。

その後遺物は新湊市立新湊南部中学校において保管されていたが、平成7年度新湊市教育委員会が、これを譲り受けた。長い年月の間に散逸したものは多く、各々に注記されていないため出土地点が定かでないものも含まれている。

しかし、既には場整備など大規模な工事が行われた後の今となっては、その質、量ともに貴重な資料であることを鑑み、今回の調査地域から出土している遺物を取り上げて、遺跡理解のための一助としたい。

## (2) 作道地区的資料について

作道地区において郷土クラブが遺物を採集した場所は、現在の高島八遺跡、高木・荒畠遺跡、津幡江遺跡の3か所である。

当時の記録によると、現在の高島八遺跡の周辺は、高島南部地先弥生遺跡として記されている。そこでは広い範囲で遺物が採集されたようであり、点数にして、141点の弥生土器と3点の石器を採集したとある。特に、弥生時代中期の土器片が多くあったということである。遺物の包含層及び遺構面は、当時の表土下30~80cm内に存在するのではないかと考えられている。

高木・荒畠遺跡の周辺からは、弥生土器、珠洲焼が採集されている。弥生土器37点と、珠洲焼6点と点数こそ少ないが、部分的な採集遺物であり、今後の発掘が期待されると記されている。

津幡江遺跡については、遺物を採集した詳細記録は記されていなかったが、譲り受けた遺物中に西津幡江と記された土器が多くあったので、当時の活動を記憶している人と現地を確認し、それらが現在の津幡江遺跡からの採集品であることを確認した。

遺物は散逸したものも多いが、第9図に示した。201及び205は、高島八遺跡の採集品である。201は、強く外反するU縁部内面に、綾杉状文が施される。202~204・206~213は、津幡江遺跡での採集品である。202の杯部上半は、やや外反気味で縁が鋭く突出するものであり、赤く焼かれている。203は、長頸壺、204は小型壺とみられる。206・210・212・213は器台である。206は、脚部がハの字形に広がるもので、透かし穴が4孔あけられる。外面はミガキ調整である。210はハの字形に広がる短い脚部をもつ。212の内面は絞り痕がみられる。213の外面は赤彩されミガキで仕上げられる。207~209・211は高杯である。207は、脚柱部から脚裾部にかけて緩やかにわん曲して広がるものである。214は高木・荒畠遺跡での採集品である。

## 3 遺物の散布状況

ここでは、今回の調査地区から採集した遺物を時期別に大別し、その時代ごとの散布状況を概観して遺跡の有無を考える資料としたい。

散布状況は、1辺200mの方眼を設けその傾向を示した。ただし破片数のみを統計化したものであり、個体数は明らかにしていない。

### (1) 縄文時代の遺物散布状況（第10図）

縄文土器5片の内4片は、調査区東側の津幡江地内から採集している。これまでの調査で、津幡江地内には縄文時代の遺物が比較的多く散布することが分かった。現在分かっている中で、市内のもっとも古い縄文中期前葉の土器は、津幡江で発見された。ほかに、鏡宮北遺跡や久々渡遺跡、高木・荒畠遺跡でも土器が見つかっており、作道地区は縄文時代の遺物の割合が多いところだといえる。

採集遺物は、摩耗したものは少なく、良好な状態のものが多い。地表から約1m下の地点で縄文土器が出土していることからも、遺物が河川からの流れ込みによるものと考えるより、遺構面が地表から深いため、地表

に現われないで遺跡が良好に保存されていると考えた方が妥当ではないか。津幡江地内に多く分布することも、地の標高が低いことと関係するかもしれない。

これまで点であった縄文時代の遺跡が、面となって広がりを確認できる可能性がある地域といえる。

#### (2) 弥生・古墳時代の遺物散布状況（第11図）

弥生土器・土師器は調査区西側の、西神楽川と東神楽川の分流付近一帯に多く分布する。特に、北西部の高島A遺跡や作道遺跡からは、出土品も含めて多くの土器が見つかっている。作道遺跡周辺は、主に中期の時期を中心であり、高島A遺跡はどちらかというと後期以降の時期のものが多いようである。時期によって居住空間をかえながら、この一帯には当該期の遺跡が良好に残っていると推定される。

また、調査区東側の津幡江においてもまとまって弥生土器が見つかっている。上記の縄文土器が散布する場所と重なっており、大坪川と下条川流域であるこの地域は、早い時期に陸地化がすんだのではないかと推測される。

#### (3) 古代の遺物散布状況（第12図）

須恵器・土師器がある。

採集することができた遺物の量としては、古代の遺物はほかの時期に比べてあまり多くなかったが、全体の遺物の分布状況は、前代の弥生・古墳時代と似るようである。ただし、弥生土器が多く分布していた高島A遺跡及び作道遺跡の北部分では、古代の遺物が極端に減ること、かわってその南側に位置する鏡宮北遺跡及び作道遺跡の南部分に、古代の遺物が分布する傾向が見られる。このことからも当時、高木・荒畠遺跡周辺に、当地域の中心地が移行していったことが推測される。

#### (4) 中世の遺物散布状況（第13図）

珠洲焼、中世土師器、中国製青磁、古瀬戸がある。

ほぼ全域に分布がみられるが<sup>1</sup>、この時期から特に、南東部の今井集落や沖集落近辺での分布が目立つようになる。また、北東部の野村集落東側、東津幡江集落の西側は、各時代とも遺物の量としては分布が稀薄な地域であるようだが、中世の遺物に関しては顕著である。

作道の各村は、中世以前の早い時期から開拓が行われていた地域であったようで、今回の中世遺物の分布はそれを裏付けるものと考えられる。また12世紀頃には、在郷領主や荘所を結ぶ道として、草島往来が造られ、江戸初期にはすでに道として成立していたようである。江戸時代には御薦道とも呼ばれた草島往来は、高木、今井、沖を経ていた。

#### (5) 近世以降の遺物散布状況（第14図）

越中瀬戸、越前、伊万里、唐津、貨幣その他近世陶磁器がある。

近世以降の遺物は、全体に量が増加すると共に、ほぼ全域に分布する。特に、中世に引き続き今井集落や沖集落近辺、また殿村集落近辺に多く分布する。

## 4まとめにかえて

今回調査対象とした地区の遺跡について、現地踏査と資料整理を行なった概要は既述のとおりである。

今年度の調査区は従来より、開発に先立つ分布調査などが、市内の他の地域に比べると頻繁に行われてきた地域であった。それのみが原因とはいえないが、遺跡の占める面積が、新潟市の中ではもっとも広い地区であった。また、発掘調査も所々で行われ、比較的遺跡の概要が把握されているところだったといえる。

しかし、開発に先立つ調査は、各箇所ごとに行なう調査のため、全容が見えにくい。今回、現在の段階で全市域を詳細にかつ平均的に調査を行うことができたと思われる。

調査の結果、これまで知られていなかった場所においても遺跡の発見があった。まだまだ検討の余地は残るが、今後の発掘調査により新しい発見が期待できる地域といえよう。

最後に、下記の遺跡一覧表をもってまとめにかえたい。

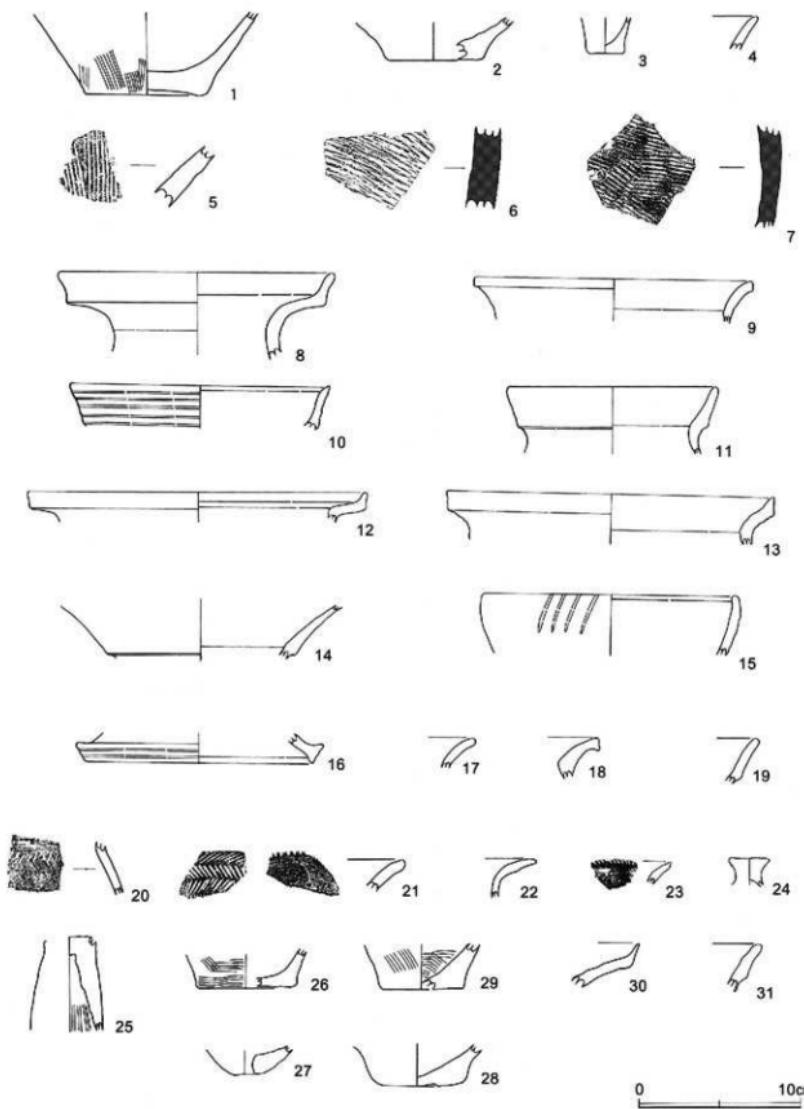
本報告書 番号	新 遺 跡 地図番号	本報告書で の変更等	『1993年新富山県遺跡地図』	『1972年旧富山県遺跡地図』	備 考
1 朴木A遺跡	203026	周知	203026朴木A遺跡 203027朴木B遺跡	230朴木A遺跡 229朴木B遺跡	
2 高島A遺跡	203028	周知	203028高島A遺跡 203029高島B遺跡	233高島A遺跡 234高島B遺跡	
3 鏡宮北遺跡	203017	周知	203017鏡宮北遺跡		
4 鏡宮II遺跡	203043	周知			
5 作道遺跡	203032	周知・範囲変更	203032作道遺跡		
6 久々瀬遺跡	203041	周知			
7 鏡宮遺跡	203030	周知	203030鏡宮遺跡		
8 高木・荒畠遺跡	203031	周知	203031高木・荒畠遺跡	240高木遺跡 241荒畠遺跡	
9 南浦遺跡	203040	周知			
10 津幡江遺跡	203033	周知・範囲変更	203033津幡江遺跡	242津幡江遺跡	
11 津幡江西遺跡	203049	周知			
12 今井遺跡	203044	周知・範囲変更			
13 今井南遺跡	203045	周知・範囲変更			
14 今井二島遺跡	203046	周知			
15 今井西遺跡	203055	新規			
16 野村遺跡	203056	新規			
17 東津幡江遺跡	203057	新規			

付表 調査遺跡一覧

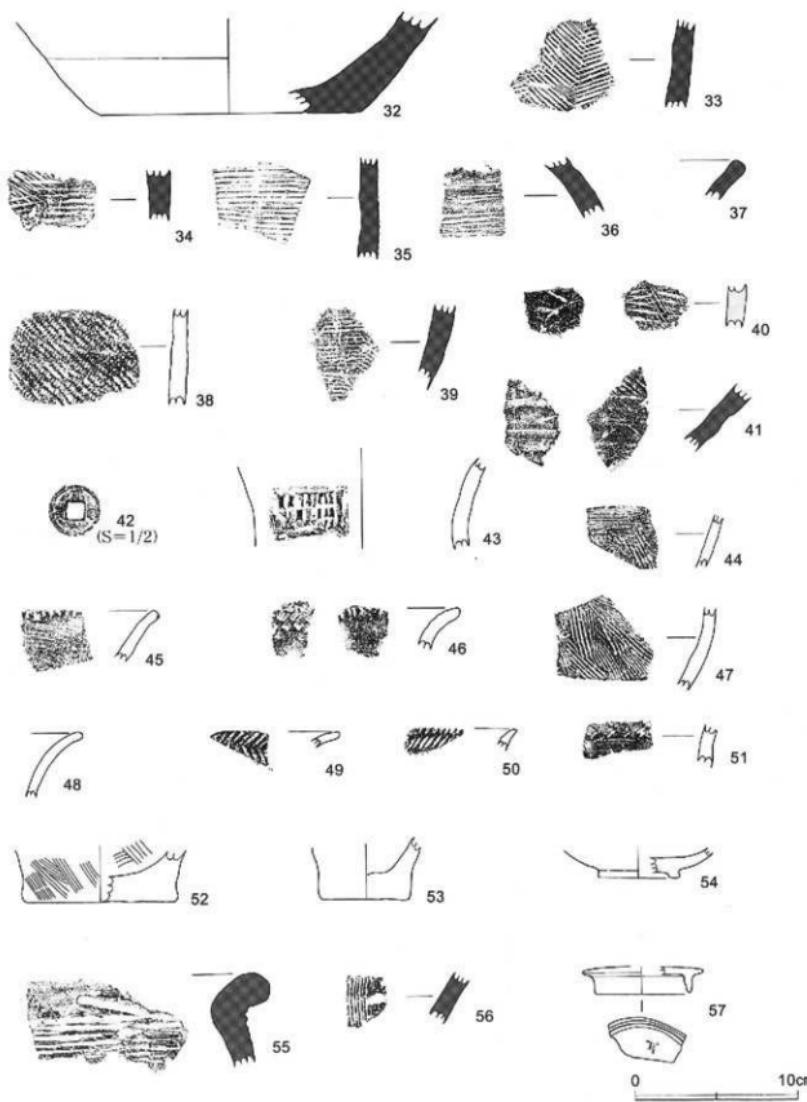
## 参考文献

- 新湊市 1964 「新湊市史」
- 新湊市 1992 「新湊市史 近現代」
- 新湊の歴史編さん委員会 1997 「しんみなどの歴史」
- 新湊市立作道公民館ふるさと講座事務局 1994 「作道村々の小字しらべ」
- 作道郷土史編集委員会編 1989 「私達の聚落 作道」
- 大島町教育委員会 1991 「大島町荒畠遺跡発掘調査概要」
- 富山市日本海文化研究所編 1998 「草島道調査報告書」富山市日本海文化研究所紀要第11号
- 久々忠義他 1995 「射水平野の遺跡-神楽川流域を探る-」『大境第16号』
- 青木・彦他 1996 「射水平野の遺跡-古代北陸道を探る-」『大境第18号』
- 青木・彦他 1998 「中世の放生津について」『大境第19号』
- 平凡社地方資料センター編 1994 「日本歴史地名人系第16 富山県の地名」
- 富山県教育委員会 1972 「富山県遺跡地図」
- 富山県教育委員会 1993 「富山県埋蔵文化財包蔵地地図」

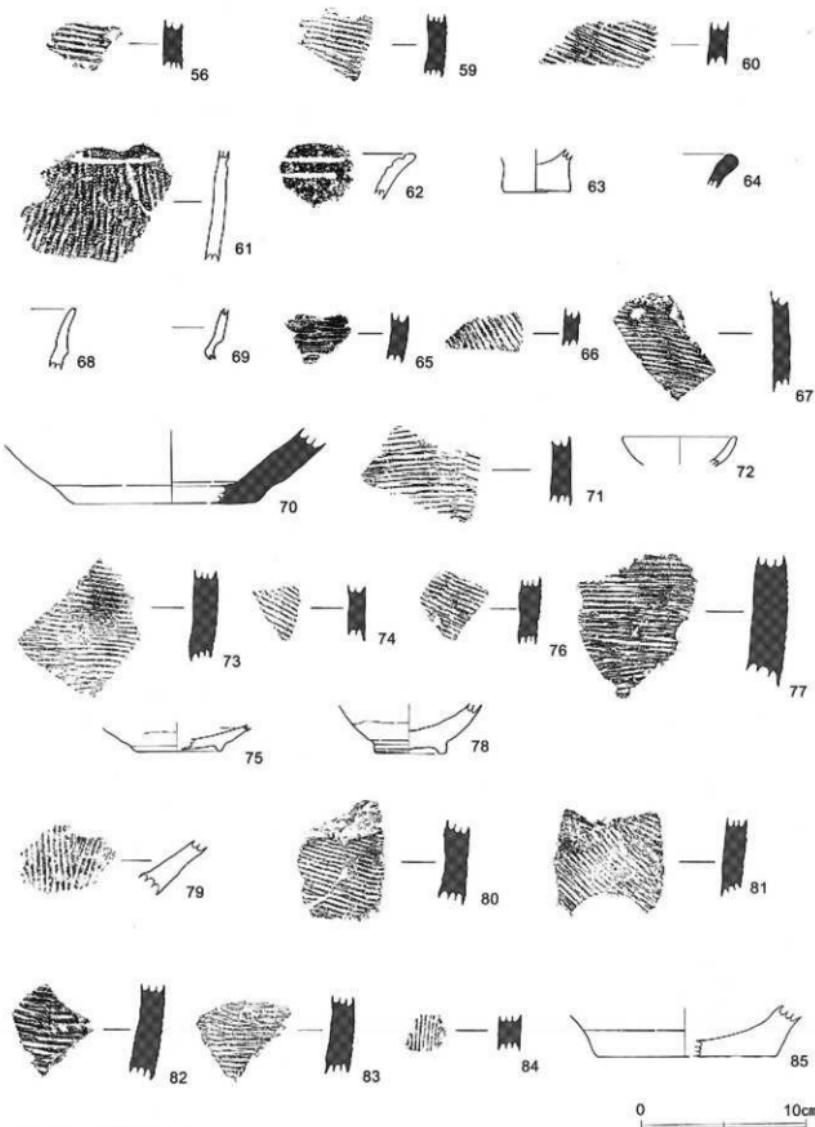
図 版



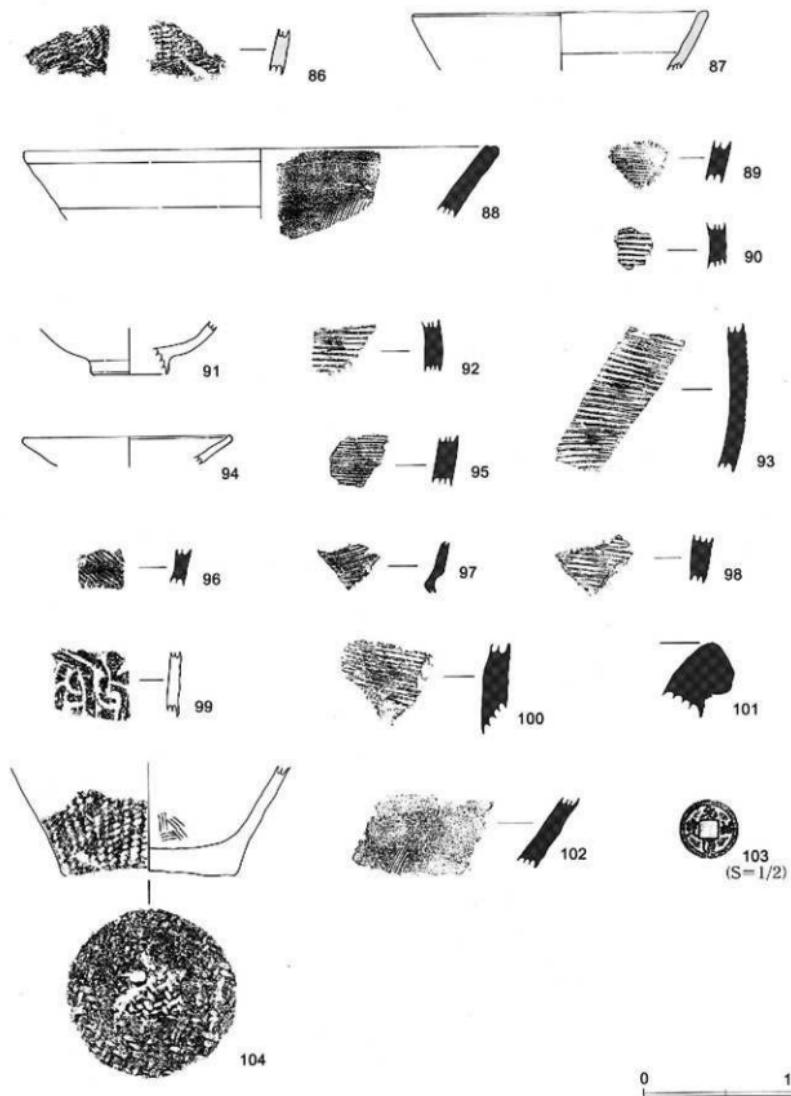
第5図 遺物実測図 (1/3)



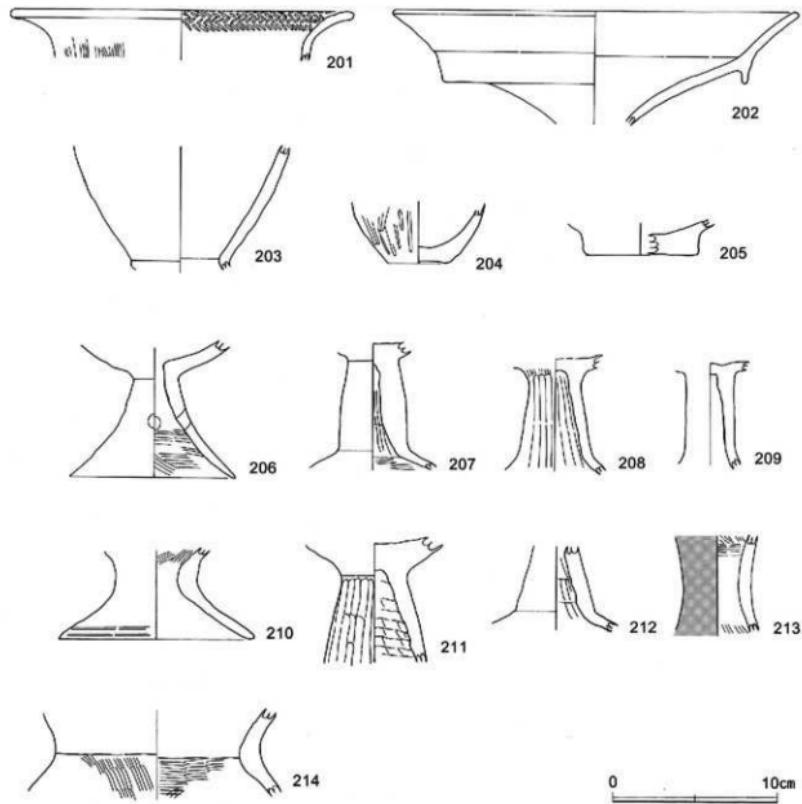
第6図 遺物実測図 (1/3)



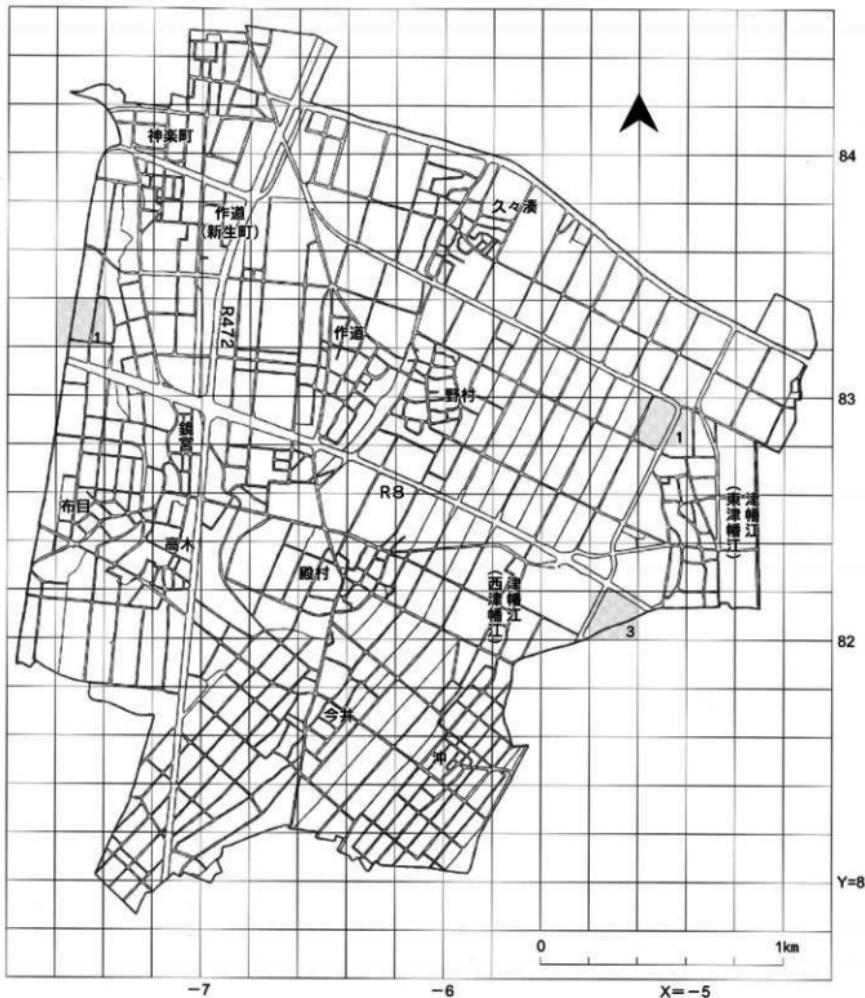
第7図 遺物実測図 (1/3)



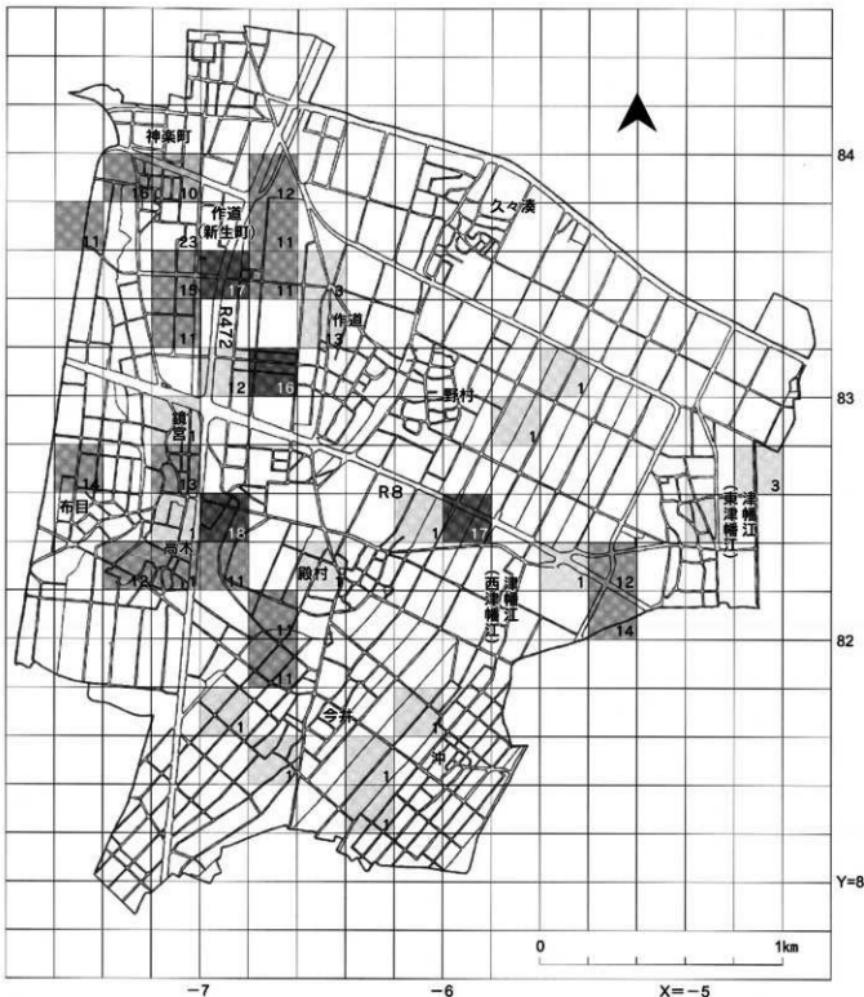
第8図 遺物実測図 (1/3)



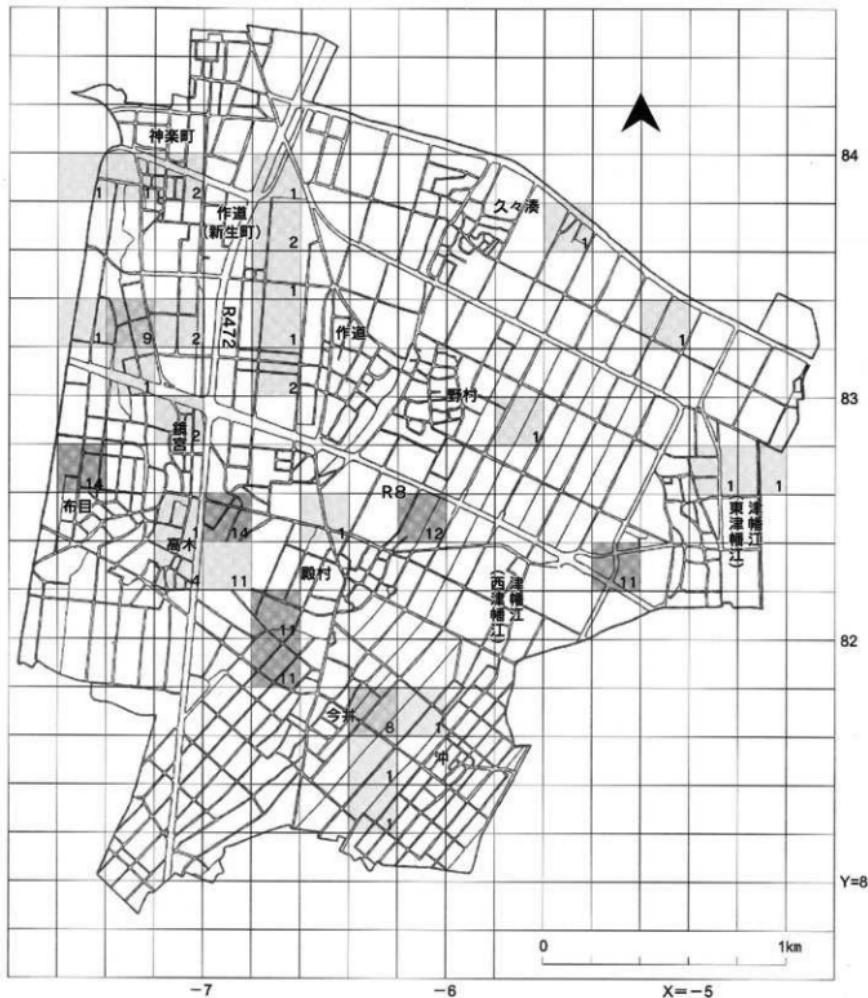
第9図 遺物実測図 (1/3)



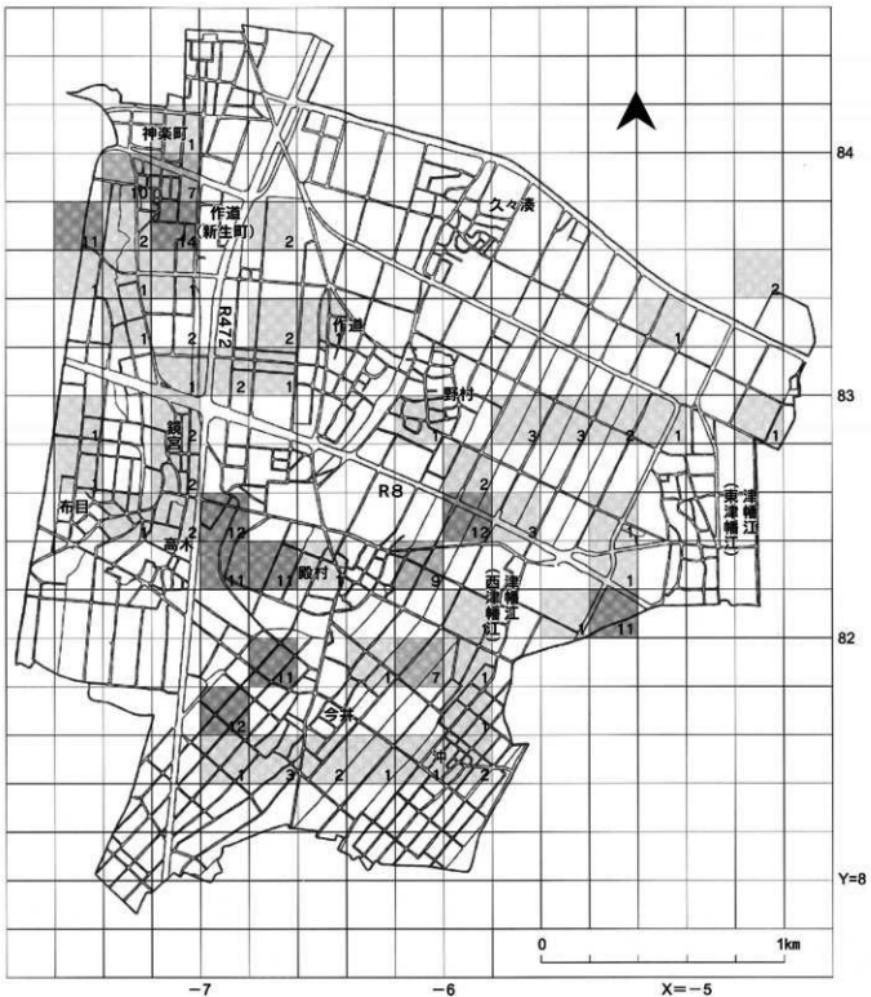
第10図 繩文時代の遺物散布状況 (1/20,000) ※数字は破片数



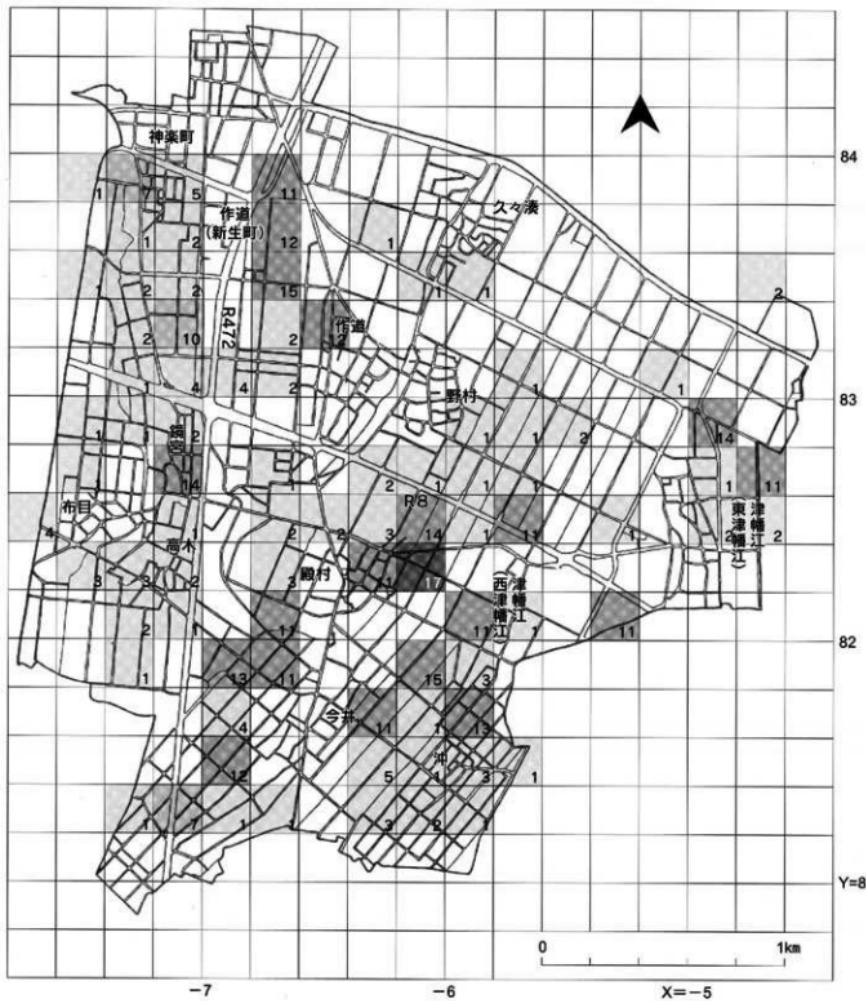
第11図 弥生古墳時代の遺物散布状況 (1/20,000) ※数字は被片数



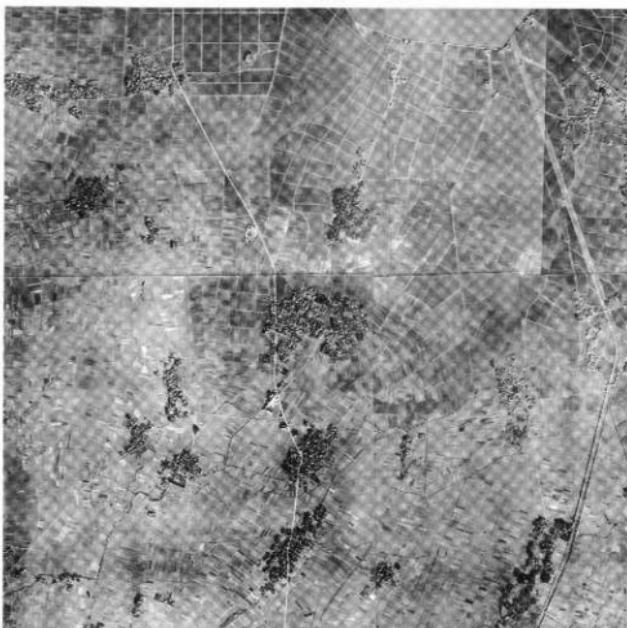
第12図 古代の遺物散布状況 (1/20,000) ※数字は破片数



第13図 中世の遺物散布状況 (1/20,000) 率数字は破片数



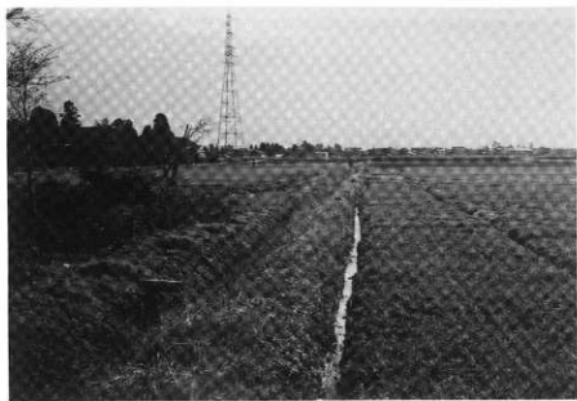
第14図 近世以降の遺物散布状況 (1/20,000) ※数字は破片数

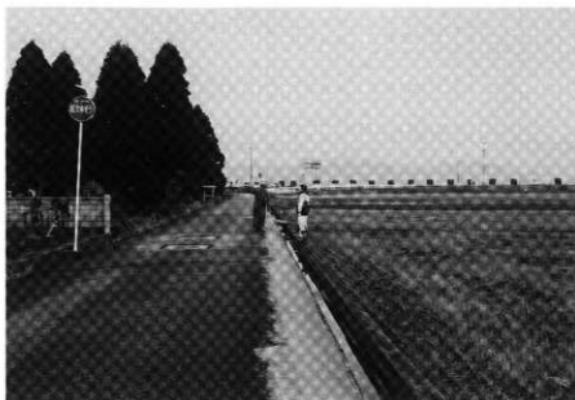


1 昭和22年  
(米軍空撮)



2 昭和62年







朴木A遺跡  
(南から)



高島A遺跡  
(北から)



鏡宮北遺跡  
(北東から)



鏡宮II遺跡  
(北西から)



作道遺跡  
(北から)



久々瀬遺跡  
(南西から)



鏡宮遺跡  
(南から)



高木・荒畠遺跡  
(南東から)



南浦遺跡  
(南から)



津幡江遺跡  
(東から)

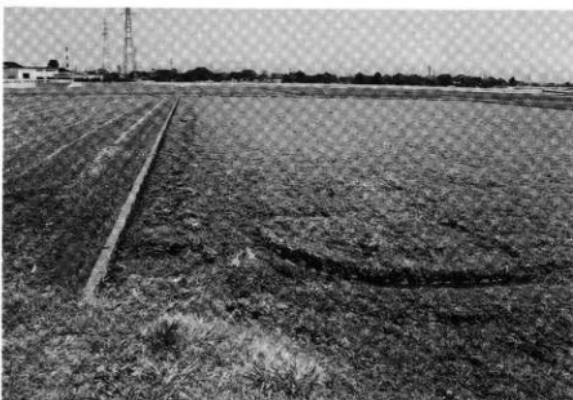


津幡江西遺跡  
(東から)

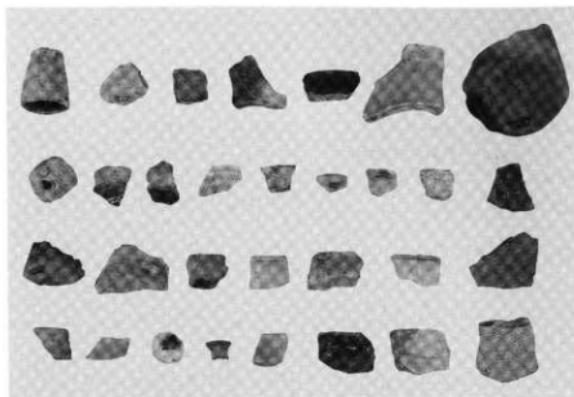


今井遺跡  
(南西から)

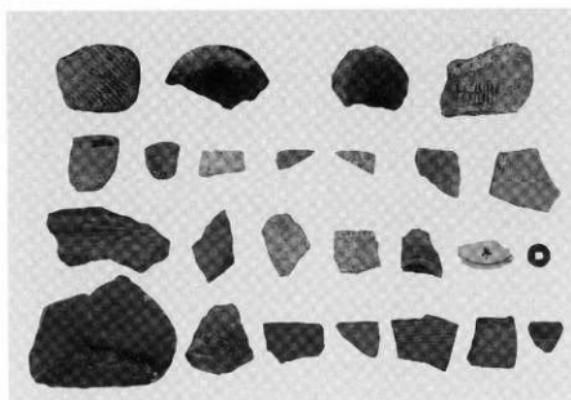




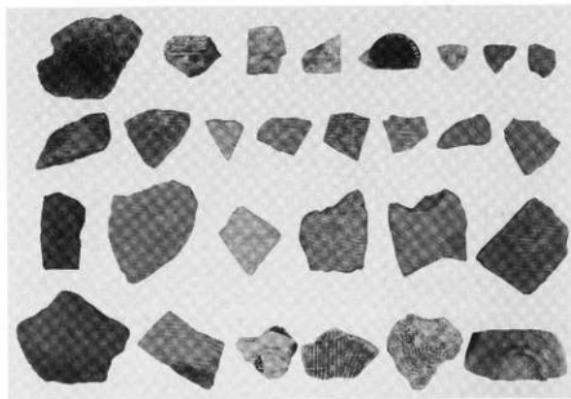
第5図遺物

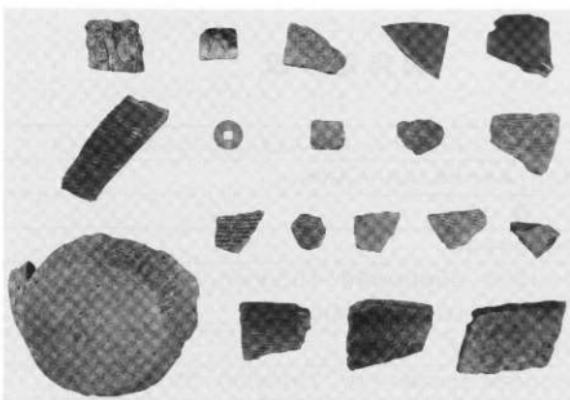


第6図遺物

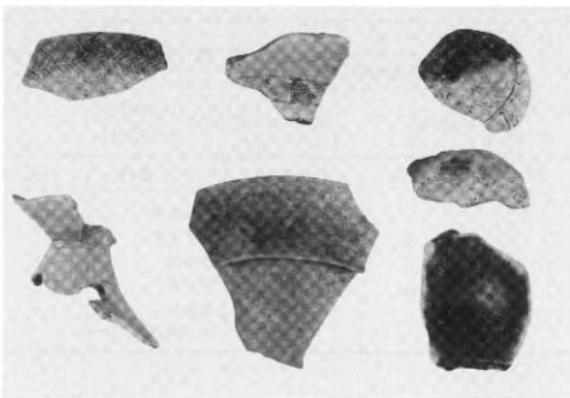


第7図遺物

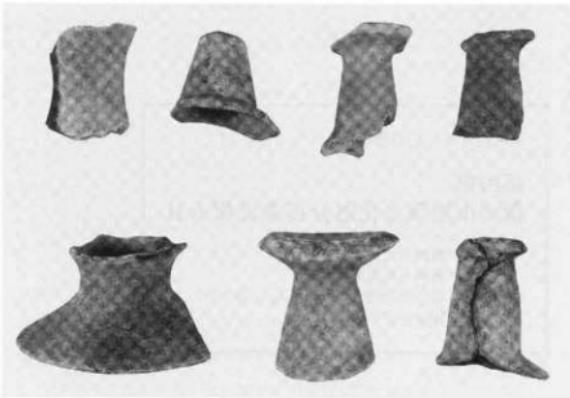




第8圖遺物



第9圖遺物(1)



第9圖遺物(2)

## 報告書抄録

ふりがな	とやまけん しんみなとしまいぞうぶんかざいぶんぶちょうきほうこくII						
書名	富山県 新湊市埋蔵文化財分布調査報告II						
編著者名	宗 離子						
編集機関	新湊市教育委員会						
所在地	〒934-8555 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312						
発行機関	新湊市教育委員会						
所在地	〒934-8555 富山県新湊市本町二丁目10番30号 TEL 0766-82-8312						
発行年月日	西暦1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
市内遺跡	富山県 新湊市内	016203	-	36°47'00"	137°05'00" 19980601 19990331	-	-
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
市内遺跡	-	縄文 ~ 近世	-	繩文土器 弥生土器 土師器 須恵器 珠洲焼 近世陶磁器			

平成11年3月31日発行

### 富山県 新湊市埋蔵文化財分布調査報告II

編集 新湊市教育委員会  
 発行 新湊市教育委員会  
 富山県新湊市本町二丁目10番30号  
 印刷 リタニグチ印刷

